貧困からの脱出を阻害するもの
── ドミニカ国農民社会の事例 ──

江　口　信　清

1　はじめに

1－1　問題意識と本稿の目的

グローバライゼーションという地球規模での経済・社会・文化的な動きがますます激しさを増し、とりわけ、貧困の問題は全世界的に深刻になりつつある。絶対的貧困に喘ぐ人口はとくに発展途上国に多く、その割合は増えつつある[1)]。そして、北の先進国からこれらの国への援助は焼け石に水の様相を呈している。外部からの一方的な援助は貧困の撲滅にはしばしば役に立たず、むしろ内発的な動きこそが、近代的「発展」という潮流に取り残されてきた人たちにとってのもう一つの生きる道である、と指摘されてきた[2)]。いわゆる内発的発展論という考え方である。この種の発展を考える場合、貧困から脱出しようとする人たちは、自発的に、しかも集団として、共通の目標を掲げて、共同で作業を進めることが最も効果的であることはいうまでもない。そのような場合に、集団を指導する存在として、鶴見和子は市井三郎の定義を借用して、キー・パースンの必要性を指摘している[3)]。キー・パースンとその支持者が一丸となって、はじめて内発的な発展の可能性が生じるのである。しかしながら、いわゆる伝統的社会においては、新たな考え方や行動の萌芽がたとえ見られたとしても、その成長を阻害する要因が山積していることも少なくない。とくに、その要因が伝統的価値観である場合、それを乗り越えて新たな価値観を導入し、自らが変化していくということが、伝統に慣れきった人たちにとって大きなチャレンジであることは言うまでもない。さらに、

他律的な生き方を否おうなくとらされてきた社会では、自律的な生き方への方向転換は容易なことではない。また、キーパーソンと正反対の保守的な人物がコミュニティの指導者となり、社会を導く場合が少なからずあり、なおさら新たな道へ進もうとする人々にとってこのような人物とその支持者は大きな障害となる。

本稿の目的は、上述のような、内発的発展を阻害すると考えられるいくつかの要因を、カリブ海のドミニカ国の農民社会の事例を基に考察することである。とくに、人々の価値観の形成に大きな影響力を持つ宗教、教育、そして口頭伝承に焦点を当て、これらがいかに人々の貧困状態からの脱出を阻害しているかを考察する。まず、宗教や口頭伝承に関する一般的な特徴について述べ、次に仮説を提示しておきたい。

１－２　競争に走る人々

19世紀前半に解放されたカリブ海地域の奴隷は、少なくとも三種類の適応形態をとった。一つは、プランテーションの緊縛の思い出を断ち切るためや、そもそも平地が多い島では獲得する土地がないためにこの地域から移民して去る、移民適応である。二つ目は、イギリス領ギアナ（現ガイアナ）、オランダ領ギアナ（現スリナム）などの海岸近くの平地はちょっとした嵐で水害を被る傾向にあったので、奴隷解放後、多くが安価で売却されるか、見捨てられた結果、この海岸近くの平地に入植して独立自営農民化する平地適応である。そして、第三のものは、山がちの地形からなる島ではプランテーションの高地の後背地に入植して、独立自営農民化する高地適応である。たとえどれだけ小規模であれ、いままでの奴隷という地位から脱して主人になり、忌まわしい過去から決別すべく、人々は争って土地を獲得した（Lowenthal 1961）。

本稿の事例として用いられる村落社会の位置するドミニカにおいても事情は変わらず、1838年の奴隷制の完全実施以降、解放された人達は競って内陸

部に入り、住居を建設し、畑を開発していった。この過程で「クッドゥ　メ」（無償の労働力交換）、葬式、そしてカーニバルなどでの村人間での協力はあったものの、各世帯の生産や生活は基本的には各世帯単位の努力によって達成された。急峻な、地形的な特徴や道路の未整備・交通手段の未発達などによって、外界との接触が比較的少なかった頃（1980年代初頭まで）、集団の統合は比較的高く、呪術のオベアは農民社会の同質性を維持する装置としても働いた。すなわち、逸脱するものは、カーニバルの際の制裁のように、オベアによって制裁されたのである。したがって、呪術やカーニバルの際の制裁によって平準化が行われたとも言える（江口 1990）。しかし、道路が整備され、交通手段が発達し、さらに情報化が進み、貨幣経済化が急速に進行する過程で、集団の統合力が急速に低下していき、外からの商品を競って購入するという現象となって、これまでとは異なった形での平準化が生じてきた。農民にとって唯一に近い現金収入をもたらすバナナ栽培の困難化が生じてきた一方で、急速な貨幣経済化が多くの人達を「絶対的な貧困」のレベルに陥れてきた。

１－３　体制維持装置としての宗教

ところで、宗教は、私たちとあらゆるものとの関係や存在に意味を与え、生きることに意義付けする、文化そのものである。宗教は私たちの生活を律し、集団生活、あるいはコミュニティに秩序を与えるのである。教義の解釈にのっとった一定の行動・言動を人々がとる限り、それなりに評価されるのに対して、逆の場合には非難されることになる。それは、そういう意味で、伝統の維持装置であるとも言える。本稿の事例として扱われるドミニカを含むカリブ海地域では、宗教は一種の支配の装置として機能してきた。1492年のコロンブスらスペイン人らのこの地域への到来以降、ヨーロッパ人は先住民だけでなく、アフリカから強制連行してきた奴隷及びその子孫を強制的にキリスト教徒化した。白人の主人に対する奴隷の反抗は、神への謀反、反逆

と見なされた（Murrell　2000: 13）。神の教えに忠実に生きる、すなわち主人の命令に忠実に生きることが要求されたのである。奴隷の子供たちに、主人はポール、デイヴィッド、アイザヤなど、好んでキリストの使徒の名前を付ける者も多かった。島々は教区によって分割され、それぞれの教区にやはり聖デイヴィッド、聖マイケル、聖ポールなど、使徒の名前が付けられた。ドミニカについても事情は同じで、今日まで変わっていない。

1838年の完全な奴隷解放直前にも、奴隷への教育が盛んに議論されたが、かならずしも積極的な意見が大半を占めたわけではなかった。「植民者階級と他の支配的集団のメンバーは、その確固とした成層化のシステムを伴ったプランテーション社会の基本的な特徴を維持することに、大変な関心を持っていた。この事実は、奴隷の子どものための教育施設の充実を阻害しようとする、初期の努力に反映された」（Bucchus 1980: 28）。奴隷解放後、教会、とくにカトリック教会はいちはやく初等教育の普及に取り組んだ。植民者は、一般的に、教育を受けた奴隷は自由を求めて、緊縛を嫌い、また子どもが洗礼を受けることに反対するとして、教育に熱心ではなかった。しかし、「イギリス政府が法的な奴隷制を廃止することが明らかになったとき、植民者らは、教育が、解放後の子どもたちの「適切な」社会化にとっての価値ある手段、すなわち解放された人達が、白人が支配的な社会で「木を集め」、「水汲みする」人としての役割を受容させる手段になりうる、という初期の数人の宣教師の提案を受け入れた」（Bucchus 1980: 28）。

ドミニカでは、公立学校の設置がみられない僻地にもカトリック教会による学校が設立されていった。そこでは植民地宗主国の歴史をはじめとする事柄が教育されたが、基本的にはキリスト教の枠内で実施された。学校教育には祈祷や賛美歌がふんだんに盛り込まれた。これらの教会に対して植民地政府は補助金を支給した。キリスト教会は教育だけでなく、国家行事には積極的に参加し、協力した。これは独立後、現在に至るまで大きな変化はない。すなわち、体制の維持・安定のためにカトリック教会が大きく貢献してきた

といえよう。このことは、国家が教育を通じて間接的に、新しい動きを封じ込めるということや、現状を甘んじて受け入れさせるということも意味している。

しかし、キリスト教は、その教義の解釈次第で、現状を打破し、新しい動きを始めるのにも大きく貢献してきた。ラテンアメリカ地域での解放の神学がそれに該当する。1960年代に始められた解放の神学は、大衆の貧困なる状態や抑圧された状態は罪なるものであり、キリスト者は率先して人々をこのような罪なる状態から救出するために働かなければならない、としている。拡大するスラム、貧困、そして軍事政権下での人権抑圧など、ラテンアメリカには罪なる状態が現在でも広範に存在している。民衆の側に立って、現状を打破し、そして新しい方向を志向するカトリック神父もいるのである。他方、東カリブ海地域では、このような動きは今の所まで生じていない。

１－４　価値観を内面化する装置としての口頭伝承

カリブ海地域にはアフリカからの奴隷がもたらした豊かな口頭伝承がある。とりわけ、そのなかでもトリックスター（いたずら者）の登場する話しは、今日でも広く伝承されている。主人公は物理的な力を欠くが、知恵を駆使して、支配者（力の強い者）をやってしてまう。しかし、最後にはやられてしまう、といった物語で構成される。カリブ海で最も知られたいたずら者は、クモのアナンシーである。

口頭伝承は価値観の一種の伝達装置である。繰り返し、繰り返しこれを聞かされていると、この背景にある価値観が聞き手の内面に刷り込まれていく。カリブ海地域のアナンシーはガーナのアシャンティ族らの間でも色濃く伝承されてきたが（Evans-Pritchard 1967）、アナンシーは両義的な存在であるにもかかわらず、話に含意される一方の価値観のほうが他方よりも強く人々の内面に刷り込まれてきたのではないか、と考えられる。それは、下手すればもとのもくあみであり、だから敢えて新しいことに挑戦すべきではない、とい

う受動的な態度を維持させるものではないか、と考えられる。この地域の人々の歴史では、あまりにも抑圧されてきた期間が長く、新しいことに挑戦して成功することが稀であったことに由来するのかもしれない。

１－５　宗教、教育、そして口頭伝承

教育と口頭伝承は、私たちの社会化のいわば駆動力になる。教育や口頭伝承は、ただ単なる知識や技術の伝達だけでなく、それらを通じて、私たちの内面に特定の価値観を刷り込んでいく。宗教や教育は決して価値自由なものではなく、一定の価値観を背景に構成される。本稿で取り上げるドミニカの学校では、カトリックを背景にした教育が子どもたちに与えられ、また家庭でも口頭伝承が語り継がれ、非常に保守的な姿勢が培われてきたと考えられる。その結果、人々が他律的な生き方、それも共同性の乏しい生き方[4)]から、自律的な生き方に転換することが困難であり、貧困な状況から抜け出せないでいる、と筆者は考えている。すなわち、宗教、教育、口頭伝承などが人々の新たな生き方の大きな障害になり、貧困な人たちはその状態から脱出できないのである、と考えられる。

すなわち、本稿での仮説は次のようなものである。独立国ドミニカの１農村社会の人々にとっての「貧困」は、一方においてはモノカルチャー的経済を通じて北の社会の半植民地的状況に置かれているという外からの要因によって、他方においては（１）村人自身内での意味のない消費競争と（２）「神の意志」のもとでの運命論的なあきらめによって、（３）さらには子どもの頃から慣れ親しんできた口頭伝承、とくに「アナンシー」というトリクスターの話しが持つ二つの意味のうちの一方の価値観だけが刷り込まれてきたこと、そしてこれらの要因が複雑に絡まりあって再生産されてきたのではないかと考えられる。

（２）しかし、このような人たちの多くが「貧困ではない」という意識をなぜ持つのであろうか。それには、宗教、とくにカトリックの信仰について

考える必要がある。すべて神の意思に従わなければならないという考え方は、小さい頃から個々人の内面にとくに学校や教会という場で刷り込まれてきた。神を信じる限り、神は愛と恵みを与えてくれる。その信仰の場を維持するために、教会に献金をする。神とともにいる限り、精神的には満たされるという。このようにして、絶対的貧困が貧困として認識されない。すなわち物質的には貧しいが、精神的には豊かであるという状態が維持されてきた。あるいは、たとえ「貧しい」と意識しても、それはさほど大きな問題としては見なされない。

もちろん半植民地的状態という外的要因やハリケーンのような自然要因もあるが、上に示した２つの内的要因（住民自らの消費競争と宗教による精神的去勢）が貧困を生み出し、維持する上で重要なものではないかと考えられる。

本論稿に用いられる現地資料の多くは、ドミニカ国の１農民社会（グレートリッジ村）で1998年５－８月に実施された現地調査で収集されたものである。

2　ドミニカ国の概略

ドミニカ島はカリブ海東部を南北に点在する小アンチル諸島の一つである。島の北にフランスの海外県であるマリー・ガランテ、グアドループ、そして南にマルティニークが位置している。島の総面積は751km^{2}である。島の中央部を南北に1,400m級を含む険しい山脈が走っている。いくつかの山の頂きや山麓から、つねに強い硫黄臭を伴った噴煙が立ち上ぼっている。島全体が火山性のために急峻な地形が多く、365本といわれるほど多くの河川が、大西洋とカリブ海の双方に流れ込んでいる。島は亜熱帯気候区に属し、東北から西南にかけて貿易風が常に吹き付けている。このため、中央山脈によって西部と隔てられた東部側は、湿潤であるのに対して、西部のカリブ海側は相対的

に乾燥している。

ドミニカは、コロンブスらの第二次航海時の1493年11月３日に「発見」された。ヨーロッパ列強がドミニカの植民地化にしのぎをけずったが、1763年にパリ平和条約をフランスとイギリスの間で締結することで、最終的にイギリス領になった。1978年に独立するまで、イギリス領であったが、1800年代初期までのたびたびのフランスの占拠によって、今日まで様々な側面でフランスの影響が残っている。それらのうちでも言語（フランス語が基礎になったクレオール語）や宗教（カトリック）などは今日のドミニカでもひじょうに重要である。

人口は1991年時には71,797人であったが、2001年８月８日に発表された最新の「人口・住居センサス」によれば、71,727人となっている。35,293人が女性で、男性は36,434人になっている。1838年の完全な奴隷解放以降、ドミニカから海外へ移民として流出する傾向が今日まで続いている。過去10年間でも9,968人が移民として海外へ出ていった。これは１年当たり約千人の割合である。国民のほとんどは、アフリカからこの地域へプランテーションでの労働力として強制連行されてきた奴隷を祖先に持つクレオールである。カリブ海地域で唯一設けられた大西洋に面する島東北部の居留地に、約3000人ほどのカリブ族が生活している。現在の居留地は1903年に設けられ、1,480haの面積を有している。島全体で約300人ほどの白人がおり、そのほとんどが首都ロゾー周辺に暮らしている。ドミニカの1998年の１人当たりの国民総生産は3,150ドルであり、世界銀行の分類によれば中進国に該当する[5)]。

ドミニカの過半数の人たちは、小規模な畑でバナナ、ココナッツ、そしてタロイモ栽培を中心にした農業を営んでいる。

ドミニカには首都のロゾー南部に植物園がある。この一角には農務省や林野庁のオフィスが立ち並んでいる。農務省には農業普及員なども配置され、生存作物や換金作物の新たな品種の栽培技術の普及や啓発作業が行われてきた。林野庁は国立公園の維持管理や希少動物（たとえば、大型オウム「シセ

ロー」）の保護などの仕事を司ってきた。この植物園は、植民地体制のもとでは、換金作物の栽培研究を行う役割を担っていた。一般の奴隷や、奴隷解放後の農民が生存のために栽培する作物の研究ではなく、コーヒー、バニラ、カカオ、シナモンをはじめとする換金作物の研究が行われていたのである。現在、農民が生存のために栽培する作物の研究は、もっぱらカリブ海地域農業研究開発機構（CARDI）が行っている。しかし、これらに関しては目新しい成果は出ていないのが現状である。言い換えれば、CARDIがドミニカで活動を始めて20年余りになるが、バナナに代わる農作物が、零細な農民を含めて、希望の星になるといった現象はいまだ出ていない。

農業に代わって期待される産業は観光である。しかし、村落社会レベルで、観光開発が行われ、観光によって生活レベルの向上が図れたか、または図れるかというと、いまのところははなはだ疑問が残る。次に調査村として取り上げるグレートリッジ村でも、若者を中心に観光が熱心に議論されたことがある。ゲストハウスを建てたり、エコツーリストのためのガイドをしたり、と熱心に語る若者がいた。手製の看板を山道へと開く村の出入り口に立て、訪れるであろうエコツーリストの便を図ろうとした若者もいた。しかし、村人によって「発見」された「観光スポット」の小規模な滝をはじめとする潜在的な名所は、いまだ利用されないままである。

表１　グレートリッジの性・年齢別人口（1998年７月）

年齢（才）	男性（人）	女性（人）
０－９	95	86
10－19	81	61
20－29	48	57
30－39	42	43
40－49	25	27
50－59	25	26
60－69	24	24
70－	29	30
合　計	370	354

３　グレートリッジの農民と貧困

３－１　人口と世帯

以下に、調査の個別事項についてどのような実態であるのかを見ていこう。グレートリッジの住民は1982年時と比較すると、より多くの若者が村に隣接し、大西洋に面している

クロス・エステートからエステートの一部、すなわち大西洋岸に近い比較的平坦な土地を購入している。1998年時点で村の総世帯数は150世帯で、総人口は734人になっている。1982年時には総世帯数が165、総人口が748人であったので、15世帯、29人減少したことになる[6] 挙家離村した世帯や死亡してしまったことなどが主たる原因である。村の総世帯数150のうち男性単独世帯は15世帯、そして女性単独世帯が５世帯になっている。

３－２　家屋の特徴

ハリケーン・デーヴィッドがドミニカの国民に大打撃を与えて３年しか経っていない1982年には、村でコンクリート・ブロック製の壁とトタン板の屋根からなる家屋はまだ珍しかった。ほとんどが木製の家屋で、しかも狭かった。1998年ではどうだろうか。表２は家屋の構造に使用されている材質別家屋数を示している。これによると、木造家屋がまだ72戸もあるが、一部木造で残りがコンクリート・ブロック製の家屋21戸、そしてコンクリート・ブロック製の家屋が57戸ある。これらの数に含まれていないが、コンクリート・ブロックで作りかけの家屋も何軒か見られる。木造建築物のほとんどは1979年９月のハリケーン・デーヴィッドによる被害を受けた後に応急用として建てられたもので、建築後20年近く経って床、屋根、その他の痛みは著しい。たいていの人は、現金が少額でもあれば、町でコンクリート・ブロックを購入して積んでいくという方法をとる。ハリケーンの被害に遭い、懲りたこともあるが、どうも他者の動きがひじょうに気になるようだ。すなわち、コンクリート・ブロックを用いた家屋は、伝統的な木造家屋より優れていると多

表２　使用材質別家屋数（1998年７月）

	材　質			
	木製	コンクリートブロック製	木・コンクリートブロック混合	合計
家屋数	72	57	21	150

くの人は信じて疑わない。木造家屋に住むことが、あたかも遅れているかのように思われているのである。

表３　世帯当たり１カ月収入額（1998年７月）

月収（＄EC）	世帯数
0	5
0 － 99	11
100 － 199	28
200 － 299	20
300 － 399	24
400 － 499	15
500 － 999	30
1000 －1999	9
2000 －2999	2
3000 －	6
合計	150

３－３　経済状況

３－３－１　絶対的な貧困世帯

表３は１ヶ月の収入別世帯数を示したものである。62世帯が月に＄300EC以下の収入しかない。この状況は、グレートリッジの約半数の世帯（49.3%）が絶対的貧困レベルにあるということを示している。なぜなら、ドミニカでは、年間＄3,000EC以下層が貧困世帯と定義されているからだ。収入がまったく無い世帯が全体で５世帯もある。

病身や精神的遅滞、あるいは老齢のために仕事がなく、したがって収入がない場合には、政府の福祉係が村を回り、調査をする。その結果、政府が必要と認定した場台には、１か月＄50ECの生活保護費が支払われる。筆者の見たところ該当者ではないかと考えられる人物でも、支給されていない場合がある。したがって、後で見るように、申告する収入がほとんど無いのに対して支出が多く、まったくバランスを欠いている世帯も多い。ただ、自家用に家庭菜園に植えられているコーヒーの豆や、あちこちに植えられているシナモンの樹皮を町で売ることもある。あるいは、生存作物としてのダシーン（タロイモの現地名）も、余分に作った場合には町の市場でや、村を訪れるハックスター（行商人）に売る。ただし、これは定期的なものでもなく、大量でもない。したがって、大金が入ってくるわけではない。

３－３－２　主な職業

グレートリッジでは、1982年の時点では圧倒的多数の世帯がバナナを栽培して、なにがしかの現金を手にしていた。しかし、1998年時点ではわずか30

表４　バナナ栽培農家と収入（1998年７月）

（単位：世帯）

バナナ栽培面積	収入（EC＄）							
	100－199	200－299	300－399	400－499	500－999	1000－1999	2000－2999	3000－
0－0.9エーカー	2	1	0	0	0	0	0	0
1－1.9	2	0	1	1	3	0	0	0
2－2.9	0	0	1	3	2	0	0	0
3－3.9	1	1	1	2	4	1	0	0
4－4.9	0	0	1	0	1	0	0	0
5－9.9	0	0	0	0	0	1	0	1
合　計	5	2	4	6	10	2	0	1

世帯のみが換金用のバナナを栽培していた（表４）。しかも、ほとんどの世帯が零細で、わずかの収入しか得ていないことが表から分かる。比較的大規模（５－9.9エーカー）なバナナ栽培世帯は２世帯しかなく、そのうちの１世帯のみが月に＄3,000EC以上を得ているにすぎない。バナナで１か月に＄1,000EC以上得ているのは、わずか３世帯のみで、残る27世帯はすべて＄1,000EC（US＄375）以下である。

１ヶ月の収入別で見た家畜の飼育数について表５が示している。1982年の時点では、相対的に金持ちは牛、そして中間層は豚・羊・山羊などの中型動物を、そして貧困者は鶏を飼育する傾向が強かったが、1998年時点ではそれほどはっきりした傾向は見えてこない。ただ、はっきりしていることは、月の収入が＄100EC以下層の世帯では牛と羊が全く飼われていないということ程度である。

３－４　「精神的には豊かです」

上に見たように半数の世帯が絶対的貧困の状況にある。それでは、住民自身は自分たちをいったいどのように見ているのだろうか。絶対的貧困レベルにあるにも拘らず、精神的には貧困でないと自認する人が存在している（表６）。村の全世帯を訪ねて話を聞くと、「金はありませんが、神がついて下さ

表５　１か月の収入と家畜所有（1998年７月）

家畜の種類	収入（EC＄）／月　（単位：世帯）										
	0	0－99	100－199	200－299	300－399	400－499	500－999	1000－1999	2000－2999	3000－	合計
牛１－４頭	0	0	0	1	0	0	3	1	0	1	8
５－９	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	2
羊１－４頭	0	0	0	1	2	0	2	0	0	1	6
５－９	0	0	1	0	1	1	1	0	0	0	4
10－	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1
山羊１－４頭	0	0	3	1	1	0	5	1	1	0	12
５－９	0	0	0	0	1	0	1	1	0	0	3
10－	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1
豚１－４頭	1	2	7	3	6	2	10	2	0	1	34
５－９	0	0	1	0	2	1	1	0	0	1	6
10－	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	2
鶏１－４羽	0	2	6	4	4	1	4	1	0	0	22
５－９	0	0	1	1	0	0	1	0	0	0	3
10－19	0	0	6	3	2	3	2	1	0	0	17
20－	0	0	0	0	3	0	3	1	0	2	9
兎１－４匹	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
５－９	1	0	2	0	0	0	0	1	0	0	4

注）一世帯で複数の種類の家畜を飼育する場合もある。

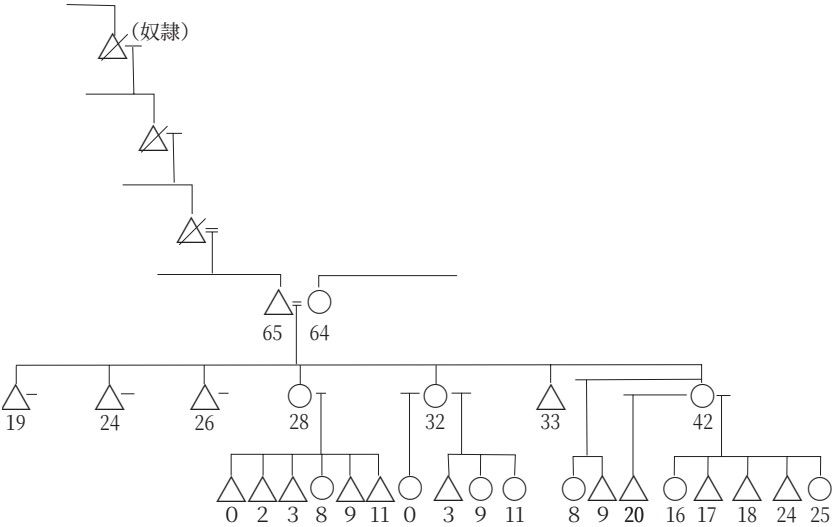
表６　男女世帯主別貧困意識（1998年７月）

（単位：世帯）

女性世帯主（人）		男性世帯主（人）	
「貧困である」	「貧困でない」	「貧困である」	「貧困でない」
25	18	63	44

います。厚い信仰を持つ限り、私たちは豊かです」というような、クリスチャンとして模範的な回答が多くの村人から返ってきた。１ヶ月の収入が＄300EC以下の64世帯のうちの17世帯が「貧困でない」と答えている。飯どきに訪れると、「何もないけど、一緒に食べていって」とダシーンとバナナからなる食事を勧めてくれる。神に対する信仰が経済的な貧しさを超越して、精神的に豊かにしている。

しかし、信仰の場であるカトリック教会では、各人、収入の10％が献金されることが不文律になっている。たとえバナナ販売の収入がなくても、何らかの収入があれば、そこから教会へ献金する。しかし、筆者がたまたま1998年の調査時のある日曜日のミサに出席していたとき、「少ない献金で恥を知れ」と白人の神父がグレートリッジの人たちに苦情をいう姿を目撃した。教会では、毎週、前週の献金総額を同じ教区の他の村の教会のそれと比較して、神父がアナウンスするのである。グレートリッジのそれが最も少なかったのである。また、別な日には、私は出席していなかったが、神父が「小銭ばっかりじゃないか」と言って、信者の前で祭壇に献金をばらまいたと村人は証言している。バナナ栽培から脱落する農民が相次ぎ、そうかといって代替できる現金収入の機会があるわけではない。神父も経済的な事情を十分に理解しているはずである。しかし、神父から嫌味を言われても、村人は日曜日になれば、正装して教会へ参り続ける。その人たちが言うのである。「私たちは精神的に豊かなのです」と。



注）△は男性、○は女性、そしてそれぞれの記号に斜線が入っているものは死亡を表す。数字は1998年７月１日時点での各人の年齢である。縦線で結ばれた関係は親子関係、＝は正式な結婚をしていることを、そして△－や○－は正式な結婚はしていないが、異性と性的関係を持つ（持った）ことを表している。

図１　Ａ氏の世帯構成

３－５　Ａ氏の事例

世帯に収入がほとんどなくても、27人が一緒に暮らしているという例もある（図１）。この世帯は、Ａ氏夫婦と、４人の息子と３人娘、および彼女らの18人の子どもからなっている。Ａ氏宅の家屋はコンクリート・ブロック製で、２寝室、居間、台所からなっている。屋外にも木製の伝統的な台所がある。ここは、長時間にわたって強火を要するダシーンやバナナの調理、そしてコーヒー豆を炒ったり、燻製肉を作るために使われる。入り口へ続く道や垣の花は、美しく手入れされている。Ａ氏の畑地などは４ヶ所に分散しており、そのうち３エーカーは隣接するクロス・プランテーションから購入したもので、現在、この土地でダシーンを栽培している。0.15エーカーは父から相続し

た、家の敷地である。さらに、３エーカーの土地が家から歩いて15分の谷地に、そして１エーカーの土地が家から歩いて30分の谷地にあるが、これら２ヶ所はいずれも官有地で、A氏が不法占拠してきた。かつては、これら２ヶ所でもダシーンを作っていたが、不便なところにあるので、現在は使っていない。家庭の主たる電化製品は、冷蔵庫（1993年購入）、電話（1998年設置）、テレビ（1989年購入）、ラジオ（1993年購入）、調理ストーブ（1993年購入）である。月に電気代最低40ドル、電話代20ドル、そしてケーブルテレビ代50ドルの合計110ドルを支払う必要があるが、支払いは滞りがちである。現在、貯金はないし、誰からの送金もない。家畜もいない。現在、ダシーンしか作っていない。収入はダシーン販売のみからしかない。収入は多いときで月＄400E.C.ほどになるが、少ないときは何もない。ないときのほうが多い。娘のボーイフレンド（子どもの父親たち）は子どもの扶養料を払っていない。1982-83年の筆者の最初の調査時には、Ａ氏はバナナを作り、家畜を羊３頭、山羊３頭、鶏12羽、そして兎を１匹飼育し、年間収入は＄1,800E.C.あった。1993年にバナナ栽培を中止した。イギリスの企業が要求する質の高いものを作れなかったからである。

日曜ごとに、カトリック教会へ通っている。

４　グレートリッジの学校と宗教

４－１　ドミニカ国の現在の教育方針

学校教育は国のいずれを問わず、子どもの社会化・文化化の一翼を担う重要な装置である。教育は国民国家の意識を強化し、将来を支える成員を再生産する装置である。とくに、宗教教育は従順な国民を再生産する強力な手段であるし、その助けなくしては学校教育を維持できないほどである。本章では、グレートリッジにおける学校教育の変化とその特徴を、学校が社会化・文化化の機関であり、また国民作りの装置であるという点から、子供たちが

いかに宗教的に従順な国民として仕立てられていくのかを考えてみる。

現在のドミニカの教育は、1997年に施行された『1997年教育条例』に基づいて実施されている。公立学校と政府が一部助成する私立学校の双方とも、この条例に基づいて教育を行っている。まず同条例中の宗教に関する条項に触れておこう。

（１）第19条は「生徒が教育施設において他者に迷惑をかけない限り、あらゆる宗教的、政治的、道徳的、ないしは意見を表明できる」としている。

（２）さらに第142条第１項では、次のように明確に述べられている。「公立学校や政府が助成する私立学校での１日は、学校に出席して、全生徒そろっての集団礼拝で始められるべきである。学校の敷地が全員が礼拝をするために集うことができないように配置されていない限り、あるいはこのような礼拝を教室ですることが不便であるのなら、生徒全員が出席して礼拝という単一の行為のために準備がなされるべきである」。また、同じ第２項では、「［生徒が］宗教教育に参加したり、あるいはあらゆる場所での宗教的礼拝や教えに参加したり、控えることは公立学校や政府が助成する私立学校の受入れや出席の条件であってはならない」、と宗教による受入れや出席上の差別を認めていない。そして、「生徒の両親が、あらゆる宗教的儀式に出席することに反対したり、出席したり、あるいは学校その他で宗教の教育科目を受けるとしても、それを学校の受入れや出席の条件としてはならない」としている。さらに、同じ項で、「生徒が属する宗教団体による宗教礼拝のためにとくに設けられたあらゆる場所の、あらゆる日に登校したり、活動に参加することは、学校の受入れや出席の条件としてはならない」ともしている。また、同条第３項では、「公立学校や政府の助成になる私立学校に通学する生徒の親は、生徒は学校や他の場所で集団の礼拝や、あらゆる宗教的礼拝、あるいは宗教科目の教育や指導に参加することが認められるように書面にしたためて請求することができる。そして、請求が撤回されるまで、生徒は認められる」としている。

要するに、教育条例は生徒の宗教的権利を少なくともたてまえ上認めているのである。しかし、教育現場においては、個々の生徒が宗教を拒否する権利を実践できるかといえば、それが自由な雰囲気が決してあるわけではない。

表７　学年別・性別グレートリッジ校の生徒数（1998年５月）

性　別　（人）

学年	男	女	合計
1	10	9	19
2	14	14	28
3	13	12	25
4	15	8	23
5	15	15	30
6	14	10	24
7	21	11	32
8	5	0	5
9	10	6	16
10	8	8	16
合計	125	93	218

４－２　学校現場の１日

表７はグレートリッジ校の生徒の数を学年別・性別に見たものである。これを見る限り、男性が全体の57％を占めており、女性が少ない。

表８は、1998年５月24日前後に合計１週間、始業前から放課後まで村の学校へ筆者が出向き、参与観察したときの、１日の様子を記したものである。教室内には電灯はない。エアコンなどもない。教室間は板壁で区切られているが、空気の流通をよくするために、上下は空いている。また、各教室にはドアがない。したがって、隣室だけでなく、遠くの教室での先生や生徒の声が始終聞こえてくる。暗くて、しかも喧騒の中で授業は進行していく。表７を見ると分かるように、「神」が登場する歌が何度も歌われる。教育条例は生徒の宗教的権利を認めているが、実際には生徒は全員祈りと歌を強制されていることが分かる。

表８　グレートリッジ校５年生の１日のスケジュール

（1998年５月24日）

担任ジェームズ先生はグレートリッジ村出身で、20歳。96年11月から教員を務めるが、無免許である。生徒数は男女各々15名（９、10歳）の、合計30名からなるクラスである。

９時　予鈴　（全校生徒が校舎の西側の広場に集合。低学年が前に横並びに整列し）。

９時５分　キリスト教の賛美歌を合唱。

９時10分　国の宣誓歌を目を閉じて歌う。
校長が挨拶とお知らせを話す。６月末に実施されるスポーツ大会について。そして、高校受験資格試験の費用を未払いの生徒がいるが、この試験は大切なので、ぜひ払うように話す。

９時15分　鈴を鳴らし、校長は前から移動し、聖歌を皆と歌い、生徒と握手をする。

９時20分　教室へ移動（１限目開始）
英語の授業。教室に備えられた*Oxford School Dictionary*を使い、まずsilenceという単語を引かせ、意味を生徒に読ませる。そして、辞書の使い方を繰り返し教える。その後、glossaryとdictionaryの違いを教える。その後、*Science*の教科書を使用して、Poles, circuitなどを引かせ、辞書の使い方を教える。
（教室間の壁として黒板を使っているために、上部が空いており、しかもドアもないので、他教室からの騒音が筒抜けである。そのため、生徒は集中できない様子であり、教員は大声を出している。水筒を持ってきている生徒もいるし、テキストを持ってきていない子もいる。授業中に便所へ行く生徒は前に出て、先生にその旨を伝え、女生徒はトイレットペーパーをちぎって貰う）。

10時　（休みなしで２限目開始）
算数の時間。*Caribbean Primary Mathematics*というテキストを使用して、リッター（ｌ）とミリリッター（ｍｌ）の関係と容積の求め方を勉強する。黒板を使わずに、複数のドミノ牌、カセットテープ・ケース、びんなどを使って、生徒に質問しながら最初の15分間を進める。そして、黒板に問題を数題書き、ノートに書き取らせて、答えを考えさせる。先生は生徒の間を回り、ノートの答えをチェックする。そして、宿題を出し、前の宿題をチェックするために、生徒にノートを提出させる。１つの机に３人の生徒が座るので、狭い。他の教室からの騒音が入り、生徒は集中できないようだ。生徒の統制がとれない。“ Ready ” と先生が問うと、“ Yes, Miss ！” と生徒は答える。靴を履かずに、粗末なスリッパを履いて登

校してきている子もいる。鉛筆を持っていない子、テキストを持っていない子もいる。

10時40分　鈴が鳴り、20分の休憩に入る。外へ出て遊ぶ子、便所へ行く子、家から持ってきたマンゴーを食べる子など様々である。高学年の生徒が１個25セントのアイスポップ（アイスキャンディ）を売る。これはPTAが作ったもので、砂糖、袋代を引いて、残りは学校の収入になる。

11時　（鈴が鳴り、３限目開始）社会科の授業である。*Caribbean Social Studies*というテキストとエクササイズの本を用いて進められる。まず、生徒が５、６人のグループに別れて、先生が与えた隣国セントルシアについての観光という課題を調べる。どこから観光客が来るかを先生が質問し、本を読ませて答えさせる。エクササイズの本は、*Expo94- Magazine & Buyers' Guide*という*OECS Caribbean Trade Show*のためにグレネダ政府が商業振興用に出版したものを貰って、エクササイズの本として使っている。

先生は、生徒同士協力させて、学習させる。他からの騒音は余り気にならないようである。

11時50分　鈴が鳴る。本来はサイレントリーディングの時間であるが、社会科の課題を続けさせる。

12時10分　鈴が鳴り、全員校舎の西側に出る。祈り鈴が２度鳴る。全員が神に祈る。そして、昼飯の時間になり、子供たちは家路を急ぐ。不定期的に、２ドル50セントで学校の給食を採ることもできる。給食はパンとミルク、あるいはジュースからなる。給食用の金を持ってくる生徒はごく限られており、生徒の大半が家で飯を食べて、戻ってくる。

13時20分　鈴が鳴る。

生徒全員が校舎の西側に集合する。先生が鈴を鳴らし、全員に目を閉じさせる。そして、祈る。

13時30分　鈴を鳴らし、生徒は教室へ移動。

13時36分　科学の授業である。教室で生徒全員が立ち、“Good afternoon, Teacher”と挨拶する。前回の宿題のノートを先生は返す。ジェームズ先生が所用で出て行くので、代わりに同僚のレズリー先生が１時40分にやってくる。黒板に小さな字で、理科の問題を６問書いていく。４つの選択肢から、正しい答えを選

ぶというものである。生徒は黒板の問題を自分のノートに写し、答えを書いていくが、１人を除いて話し続ける。先生はしばしば生徒のほうへ向き、注意する。とくにうるさい生徒のノートに先生が10点減点の印を入れる。14時10分にジェームズ先生が戻ってきた。14時23分、新たな問題を先生が黒板に書き始めた。14時50分、解答を書いたノートを先生にチェックされ、返却してもらう。
他の教室から生徒の泣き声と先生が生徒をたたく音が聞こえてきた。生徒は集中して考えることが難しいようである。

14時47分　６月に催されるヴィレッジ・デイに売る工作物を作り始める。カーボン紙に絵を描き、それらを切り取る。先生が黒板に手本の人参、船、アヒル、チョウチョ、花などの絵を書き、皆がそれを真似して書く。
男女ともに絵を描くのは苦手なようである。ふだんから絵を描き慣れていないのか、ぎこちない。

15時40分　終鈴が鳴る。生徒は自分の机の周辺を片付け、帰途につく。

この１日のスケジュールから分かるように、１日に少なくとも４回、生徒・教員全員が集合して神に祈るのである。そこには有無を言わせない雰囲気が漂い、1997年の教育条例では禁止されているはずの体罰が先生によって課され、逸脱生徒を規律に従わせることになる。

４－３　教師とキリスト教

ドミニカでは、過去から現在まで教育自体はたいへん重要なものとして認識されてきた。社会的・経済的に上昇するための一種の資格、それが教育を通じて獲得されるからである。収入の不安定な農業から脱出して、安定した職業に就くためにも教育は非常に重要である。機会があれば、奨学金を得て、外国へ留学することが学生たちの夢である。かつては、それは夢のまた夢であった。しかし、今日、それは実現できる夢になりつつある。このような教育を授ける先生は、村社会ではもちろんエリートであるし、たとえ所得額が

低くかろうが、国レベルでも尊敬される、社会的に高い地位の職業でもある。

筆者が1982年に初めて村に滞在したときの学校の校長先生は女性で、2000年まで政府のコミュニティ開発省の大臣を３年間務めた。彼女はもともとグレートリッジの出身で、町の師範学校を卒業して、教員になり、以来村の学校で教えていた。村で結婚し、夫は若くして亡くなったが、現在でも村に家があり、2000年の国政選挙で落選してからは、村で生活をしている。

彼女は、かつては教師であると同時にたいへん熱心なカトリック教徒で、日曜日のミサへの出席はもちろん、町や地方でのカトリックの行事には欠かさず出席し、村のカトリック教会の指導者としても重要な役割を果たしてきた。神父の説教の後にはしばしば、彼女も教会の出席者に向かって、説教をすることがある。このような敬虔なカトリック信者だから、学校でも始業時に聖歌の合唱を必ず実施していた。

彼女が政治家に転身してから跡を継いだ校長先生は、キューバ政府の奨学金を得て、キューバに留学していた人物である。寡黙ではあるが、教育の重要性については強い信念を持っていたが、労働党政権下、請われて彼も町へ出て、教育・スポーツ関係の役人になった。村ではたいへん尊敬されていたが、彼はカトリック信者ではなく、1980年代に村に根を下ろし始めたバプテストの信者であった。「飲む、打つ、買う」といったことがこの宗派では禁じられており、彼はもちろんアルコールを飲むところも、タバコを吸うところも、少なくとも公の場では見られたことがなかった。

1990年代半ばから村の学校で校長をしている人は、30代の若者である。もちろん。村出身で、教育に大変意欲を燃やしている。彼が着任して以降、校舎の改装や便所の改装が行われ、学校がたいそう新しくなったように見える。彼は当分校長を続けるであろうが、有能な人はしばしば野心的であり、また外部の組織がほうっておかない。したがって、彼が有能な限り、いつかは町で役人に就くことになるのかもしれない。いずれにしても、有能な人が校長になり、カトリック、バプティストに拘らず、キリスト教の敬虔な信者であ

り、学校という教育の場で信仰を生徒に押しつけてきたのである。

上に見たように、生徒の宗教の権利は教育条例によって認められている。しかし、教員は社会で一目置かれる存在であり、朝礼その他の機会に神をあがめる聖歌を生徒に歌わせ、祈らせれば、生徒は否がおうでも従わざるを得ない。従わなければ、教育条例が禁止している体罰を食らうことにもなりかねない。朝、昼、放課後に神の賛美が強制されるのである。しかし、キリスト教は生徒の間に秩序を作り出す。そして、落ち着きさえ与えることができる。それは、同時に生徒各人の自由な発想を妨げる。社会化の過程で、従順な神の下僕といったイメージが刷り込まれていく。これは一種の去勢である。

5　口頭伝承：アナンシーの話し

能力ある人々を去勢するのは、なにも宗教だけではない。口頭伝承も人々を去勢するのに一役買っていると考えられる。トリクスターのアナンシーがその役回りを受け負わされている。アフリカでは社会構造をひっくり返す可能性を示し、かつへたすると元のもくあみだから気をつけなさい、という2つの意味を示唆する両義的な存在であったトリクスターのアナンシーは、カリブ海へ奴隷と共にやってきた。奴隷解放を経て今日までアナンシーは生き続けている。

たとえば、村でよく語られていた物語の一つは、次のようなものであった。

ある日、アナンシーは散歩をしていた。途中で、タイガーに出会った。タイガーは動物の中でも最強の王である。「タイガーさん今日は」「ようアナンシーか。なにをしているんだ」「散歩をしています。タイガーさんは動物の中でも王様ですよね。何でもできるのですね」「あたりまえだ。なんでもできるよ」「では泳げますか?」「泳げるとも」とタイガーが誇らしげに言った。どれ、見せてやろうか」と言って、おもむろに前を流れている川へ入ろうとした。

「タイガーさん、待って下さい。毛皮のコートを脱いで泳げばどうですか?」「それもそうだな」と言って、タイガーは自分の毛皮を脱いで、泳ぎ始めた。「どうだ、うまいだろう」「本当ですね。すばらしいですね」とアナンシーは感嘆した。みるみるまにタイガーは遠くのほうまで泳いでいき、岸からは見えなくなった。「よっこらしょ」と言って、アナンシーはタイガーの毛皮を担ぎ、町の市場へ移動していった。泳ぎ疲れたタイガーが戻ってみると、アナンシーも自分の毛皮も見当たらない。うろうろ探し回っていると、モンキーが通りかかった。「モンキー、私の毛皮とアナンシーをみかけなかったかい?」「アナンシーは町の飲み屋でどんちゃん騒ぎをしていましたよ」それから、タイガーとモンキーの２人は、町へ行き、アナンシーを見つけだし、こてんぱにやってしまったということでした。おしまい、おしまい。

この話に込められた二つの意味（すなわち知恵を使えば強い者をも打ち負かすことができる。しかし、下手をすれば、元のもくあみである、という意味）のどちらに重みをおくかは、解釈する人による。アナンシーは親から子へ、何世代にもわたって口伝えで伝承されてきた。今日では学校の副読本としてこの類いの物語がプリントされ、使用されている。学校での使用目的や、生徒の解釈はどうも一義的なものになっている。すなわち後者に重きが置かれているように考えられる。「へたすると元のもくあみ」あるいは「痛い目に遭うからやめておけ」というように解釈されているようなのである。積極的な価値観、すなわち頭を使えば支配するもの、強力なものを打ち負かすことができるといった考え方には、重きが置かれていないようだ。したがって、新しいことを試みたり、がむしゃらに勉強したり、あるいは上昇志向の努力を積み重ねる人が極めて少ないことは、その影響なのかもしれない。

6　おわりに：外部依存性の存続と飼い慣らされた貧困

グレートリッジの経済的に貧しい人たちに、「私たちは精神的に豊かです」と言わしめるものは、こどもの頃からこれらの人たちを縛ってきたキリストの教えである。奴隷に唯一生きる意味を教え、苦労にも耐えさせ、そして微笑させてきたキリスト教が、今日でも村落社会で生き続けている。学校でも、これでもかと言わんばかりに、教師は生徒に神を賛美させている。経済的に貧しくても、精神的に豊かであると思わせることで、生活を改善させる力を去勢してきたのである。村人が団結して草の根レベルで政治力を発揮し、自分たちの環境を改善・向上させるといった事にはならないのである。村人の間では消費という形での競争現象が見られる。そして、新たな物質の所有を実現することで、あたかも豊かになれるかのような幻想をもってきた。国政レベルで特定の政党の支持者になり、それによって個人的な利益を得るものはいる。しかし、それはほんのわずかでしかない。

他者に依存するという姿勢は、マンノニが指摘するような生得的なものではない（1956）。それは奴隷制とそれに続く半植民地体制が作り出してきた体質に他ならない。

確かにカトリック教会やメソジスト教会は、奴隷解放直後から初等教育に力を入れ、国民に等しく教育の機会を与える努力をしてきた。しかし、そこで行われた教育はあくまでもキリストの教えを基盤にしたものであり、宗教の枠を越えた創造性に満ちた子どもたちの創出を目指したものではなかった。それは、受け身的な子どもたちを再生産することに寄与したばかりでなく、体制の維持にも寄与したのである。キリスト教が日常生活の規範であり、人々の価値観もそれに根ざしている。教会は両義的な存在である。それには、一方で抑圧され、周縁化されてきた人たちを救済する役割があり、他方においては抑圧や周縁化の状況を維持するという二つの相反する役割である。しかし、ドミニカ、いやカリブ海では、ラテンアメリカの解放の神学といった、

カトリックの社会経済的な分野での指導的な役割は全く見られない。それよりも、キューバを除くカリブ海地域のカトリックは、むしろ農民から絞り取ることしか考えていないかのようである。自分たちに異議申し立てをさせず、また国家と一緒になって国民の多くを去勢してきたのである。貧困状況がただ単に政治経済的要因によって作り出されているのではなく、ドミニカの事例にもみられるように、宗教や口頭伝承のような内発的発展を抑制する要因がある限り、どれほど外部からの経済的支援があっても、人々が自発的に貧困から脱出することは困難であるにちがいない。

注

本稿の資料の多くは、筆者が立命館大学学外研究員（1997年９月～1998年９月の期間）として、アメリカ合衆国カリフォルニア大学サンタバーバラ校の人類学科へ客員教授として留学した1998年５月～８月に、平成10年度科学研究補助金（国際学術研究：代表山本勇次・大阪国際大学、課題番号10041041）を得て実施した際に収集されたものである。

１）*Human Development Report 2001*. New York: Oxford University Press. 参照のこと。

２）鶴見和子・川田　編（1989）を参照のこと。

３）市井はキー・パースンという概念について次のように述べている。「「リーダーシップ」という語が含意する「リーダー」という言葉を用いると、そこに「リード」される多数に対する少数者たる「リーダー」あるいは「エリート」のなんらかの政治的支配がある、と考えられがちであるが、わたしがわざわざ「キー・パースン」という妙な造語を用いるにいたったのは、その既成概念を避けるためである。この造語でわたしがとくに強調したいのは、対人的な政治的支配ではなくていわば歴史支配、つまり歴史形成における顕著な機能という意味でのリーダーシップなのである」（市井1963：33）。

４）Peter Wilsonは、カリブ海のコロンビア領のプロヴィデンシア島の人達を“Crab Antics”と称している。カニ籠の中のカニたちが互いの上にはいあがり、外に出ようとする様を言い表している。このような個人が引っ張りあいをし、共同性を欠くような生き方がドミニカの農民社会にも見られる。

５）世界銀行によれば、1999年１人当たり国民総生産に基づく分類は次のようになっている。最貧国（－755米ドル）、低所得国（756－1,445ドル）、中所得国（1,446－2,995ドル）、中進国（2,996ドル－）。

６）たとえ１軒の小屋に住んでいても、別な家の部屋の延長と見なされる場合もあり、当然、その場合には１世帯というふうには数えられていない。病身や精神的遅滞の

結果、政府の福祉係には独立した１世帯と見なされて生活保護を受けていても、実質的に生活を他者に見てもらっている場合、筆者はこれらの人たちを他者の世帯に組み込んで数えている。

参考・引用文献

江口信清　1990　『カリブ海地域農民社会の研究』八千代出版社。

市井三郎　1963　『哲学的分析―社会・歴史・論理についての基礎的試論―』岩波書店。

鶴見和子・川田侃編　1989　『内発的発展論』東京大学出版会。

Bucchus, M. K. 1980 *Education for Development or Underdevelopment?: Guyana's Educational System and Its Implications for the Third World*. Waterloo, Ontario: Wilfrid Laurier University Press.

Evans=Pritchard, E. E. 1967 *The Zande Trickster*. Oxford: Clarendon Press.

Lowenthal, D. 1961 Caribbean Views of Caribbean Land. *The Canadian Geographer* 5(1): 1-9.

Mannoni, Octave 1956 *Prospero and Caliban; Psychology of Colonization*. Translated by P.Powesland. New york: Praeger.

Murrell, N. Samuel 2000 "Dangerous Memories, Underdevelopment, and the Bible in Colonial Caribbean Experience." Hermchand Gossai and N. S. Murrell, eds., *Religion, Culture and Tradition in the Caribbean*. Hampshire and London: Macmillan Press Ltd., : 9-35.

Wilson, P. J. 1973 *Crab Antics*. New Haven: Yale University Press.